

被助成者 特定非営利活動法人アジアボランティアセンター 印

コード 番号	04-A-236
-----------	----------

【目的】

エンパワーメントに向けた女性達の取り組みは、世界の様々な地域で、着実に拡がりを見せている。しかし、まだまだ「社会を変革する」とりわけ「社会の主流を変える」までには至っていないことも残念ながら事実である。日本においても、雇用の場でも政治の場でも、男女平等の実現には課題が山積しているのが実状である。このセミナーでは文化、経済、政治等の分野において、ジェンダーの視点に立って、新しい社会の創造をめざしている方々を招き、活動や経験を学ぶ。また第5回、第6回では視点を広げ、日本同様に家父長制が根づき、女性が周縁におかれているアジア諸国における取り組みを知り、国境を越えた女性の連帯のあり方について共に考える。

【内容】

- ・ 主催：特定非営利活動法人アジアボランティアセンター
- ・ 回数：全6回
- ・ 事務局担当：山本愛
- ・ 司会・進行・総括コーディネーター：三輪敦子（元国連女性開発基金職員、ユニフェム大阪会長）
- ・ 後援：(特活) 関西NGO協議会、関西セミナーハウス活動センター
- ・ 会場：大阪聖パウロ教会(大阪市北区)

【実施経過】

- ・ 日時・テーマ・講師・講義の概要

<第1回> 11/13 (土) 18:30-20:30

「文化」「伝統」とジェンダー～女人禁制に取り組む

源淳子(関西大学人権問題研究室、大峰山女人禁制の開放を求める会共同代表)

2004年7月、自然がはぐくんできた「文化的景観」として「紀伊山地の霊場と参詣道」が世界文化遺産に登録された。しかしこの登録には、重大な問題が含まれたままである。エリアの中の通称・「大峰山」の「女人禁制」を容認したことである。「女人禁制」は、男女平等を否定した女性への人権侵害。源さんは昨年12月、開放を目指す運動を始めた。2004年3月末までに賛同の署名12,418筆が集まりユネスコをはじめ「大峰山」に関わる寺院や公的機関に訴えてきた。今後も「女性」「伝統」「宗教」をキーワードとして世界に訴えていきたい。

<第2回> 11/20 (土) 13:30-15:30

開発と新たな植民地化に抗して—アジアやグアテマラの先住民族女性たちの抵抗と模索

藤岡美恵子（反差別国際運動グアテマラプロジェクトコーディネータ）

世界各地で住む土地を追われたり、移住者となったり、暴力を受けたりといった先住民族の女性たちが抱える問題は、環境と調和しながら自然と社会の循環の中で生きてきた人々の暮らしを「豊かさ」に統合していく過程、つまり近代化と開発の過程で生じてきた。開発は先住民族の女性たちの地位をむしろ低め、近代的なジェンダー観によって、むしろ女性差別が強まった、と多くの先住民族女性は考えている。民族としてのアイデンティティを強固にもちながら女性としての尊厳を追求する彼女たちの模索は、非先住民族にとっても刺激的で、考えさせられる。

<第3回>11/29（月）19：00-21：00

雇用とジェンダー～職場の男女平等を目指して

正路怜子（WWN ワーキング・ウイメンズ・ネットワーク会長）

均等法ができて 20 年近いのに、いまだに結婚・出産で退職する女性が多くいる。せっかく男性も取れる育児休業があってもほとんど活用されていない。いったん仕事をやめて再就職すると、低賃金のパートタイマー。正社員として定年まで働いても、男性の 60 パーセントの賃金。女性の部長は 1.8 パーセント。日本では、雇用の場でのジェンダー平等が一番おこなわれている。住友裁判を支援しながら、女性の働く権利の確立をめざしたワーキング・ウイメンズ・ネットワークの活動を振りかえりながら、男女とも人間らしく働くためには何が必要か考える。

<第4回>12/6（月）19：00-21：00

政治参加と女性～女性が意思決定に参加することの意義

森屋裕子（NPO 法人フィフティ・ネット代表）

19 世紀後半、女性運動が国際的広がりをもちはじめた時の中心的課題は、「女性参政権の獲得」であった。21 世紀になった今、先達の奮闘により、女性の権利としての参政権は保証されるようにはなったものの、実質的な「意思決定の場への参画」が達成されているかという点、決してそうではない。それはなぜなのか、どうしたらいいのか、女性が意思決定の場に出ていくことで何が変わるのか、などを考える。あわせて、森屋さんが近畿圏を中心にしかかかわっている、女性を意思決定の場へ送るための運動を紹介。

<第5回>1/22（土）13：30-15：30

イスラーム世界の女性たちの現状と取り組みから学ぶ

ディーバ・ユーソフザイ・カシミル（アフガニスタン人留学生、奈良女子大学）

未だ内戦と混乱が続くアフガニスタン。タリバン政権時代には女性のあらゆる機会が剥奪されながらも、その実態が世界に知られることはなかった。現在、アフガニスタンがめざす社会・経済分野の復興過程において、女性の参加・エンパワーメントが推進されている。タリバン政権時代から「隠れ学校」などにおいて女子教育に関してきたディーバさんを迎え、アフガニスタン女性の過去・現在・未来を考える。

<第6回>1/24（月）19：00-21：00

国境を超えた連帯の意義～アジアの女性たちとともに

三輪敦子（元国連女性開発基金、ユニフェム大阪代表、AVC 理事）

国境を越えた連帯は、世界の多くの女性たちにとって抽象的なスローガンでなく、運動を続けていくうえでの大きな力になっている。インターネット等の通信技術を効果的に使うことによって、地域や国内での運動だけでは起こし得なかった成果が生まれている。連続講座の最終回は、それまでの5回をふりかえるとともに、国境を越えた連帯の流れや成果について学ぶ。そして、そのような連帯によって、社会変革を進めていく可能性について、話し合う。

- ・ 参加者数（内訳／AVC 会員：一般：ボランティア・スタッフ）

第1回 15人（6:3:6）

第2回 19人（7:6:6）

第3回 27人（13:4:10）

第4回 19人（9:3:7）

第5回 22人（3:13:6）

最終回 19人（2:8:9）

<延べ参加人数 121人>

【成果】

I. 事務局による評価

- ・ 日本国内におけるジェンダーの課題をふまえ、開発途上国における女性たちの運動との連帯の可能性を考える、画期的な内容であった。また、企画・実施段階から、ユニフェム大阪会長の三輪敦子さんに全面的に協力いただくことができ、先駆的な活動を行う講師陣を迎えることができ、大変充実した内容となった。
- ・ 各回終了後、講師、スタッフ、参加者のインフォーマルな交流の時間を設け、情報交換をはかった。多くの受講生がこの非公式の交流にも参加し、講義の場のみにとどまらず、関係作りの場をつくれたことはよかった。また、様々な活動の可能性を受講生に提供できたことは、-AVC のボランティア育成理念にも合致するものである。
- ・ 日本社会のジェンダーをテーマにしたことで、普段国際協力 NGO とは連携の少ない国内の女性組織などから参加者を得ることができ、国内の女性運動との有機的なつながりとネットワークづくりの基盤を作ることができた。世界の女性たちの課題と、私たちの足元の課題をリンクさせた活動を行う可能性を見出すことが出来たのは大変有意義である。今後も引き続き、今回の講師との関係を継続し、協働の可能性を見出したいと考えている。
- ・ 日本の女性運動は一般的に「研究者は多いが、活動家は少ない」といわれている。また、今回はジェンダーに関心を持つ女子学生の参加も多く見られた。このような中、実際に活動家として活躍する女性達の生き方や仕事を知る機会を提供できたことによって、より多くのジェンダーに関心を寄せる学生が「学問」にとどまらず、自らが女性運動を拓く主体となりうることを考えることができた。今後、より多くの若者が実践者として主体的に運動に関ることが期待される。

Ⅱ. 受講生の声(振り返りシート項目「学んだこと」より一部抜粋)

<第1回>

- ・ 今まで伝統だと思い込んでいたことが、実は人間の都合により作られ、変えられてきたことを知り驚いた。(会社員)
- ・ 歴史学や考古学、民俗学とジェンダーの問題は研究、取り組みがとても遅れている分野。基本的には女性研究者の少なさが「伝統」の中の差別性を育んでいるところもある。伝統の「今」の中身をきちんと調査研究、公開し、変えるべきは変える。変わり得たものが実は生きのびてきたことも明らかにしていきたい。その場合、基本的なことから(伝統の内容)を歴史的にきちんとつかむことが大事。差別というプリズムのみで見るとゆがんだ像になる。(自由業、女性)
- ・ とても重要な示唆に富んだ講義を聞かせていただきました。私は大峰山の問題を、はじめから「伝統の問題だ」と考えていて、自分と関わりのないことだからと軽く考えていました。しかし、守るべき伝統が、ささいな都合でころころ変えられている現状は無視できないと思います。私たち女性の権利がそれほど軽いということの証明になっていますから。大峰山の問題は広くジェンダーの問題に関わっていくと思います。女性が入ってはいけない場所がある、してはいけない職業がある。そのことを男性は「なぜそんなにムキになるの?他にもっと選択肢はあるじゃない」と、なかなか実感しにくいのかもかもしれません。男性とどう意識を合わせていくかが、今後の大きな課題だと思います。本日は本当にありがとうございました。(学生、女性)
- ・ 「文化」「伝統」とジェンダーは絡み合っていて、簡単には解決しないと思われる。「伝統」を守ることが男女差別を温存することにつながっていくことが多いと思う。どのように考えていけばよいかむつかしい。(学生、女性)
- ・ 大変興味深い講演でした。以前より「伝統」と女性差別をどのように考えればいいのか、と考えていたので、今回のお話はこれからこの問題を考えていく上で大切にしていきたいと思います。伝統はいつから始まったのか。私はインド女性の問題を勉強しましたが、女性自身も肯定している場合どのように考えていけばよいかということについて、もっと考えたいと思います。(学生、女性)

<第2回>

- ・ 近代化推進にしてもそうですが、善意によって行うことが新たな差別を生むことを意識していかなければいけないと強く感じました。エスノセントリズムということ初めて耳にしました。(学生、女性)
- ・ 今回も大変重要な考え方を学ぶことができました。最近ある男女の区別をなくす動きに対して、従来、分業がされ、優劣がなかった、という点で、今の日本社会でのジェンダー問題を考える良い材料になりました。世界的、地域的にも女性会議が行われているようですが、なぜか社会的認知度が低いことが気になります。また、ほとんどが女性の活動家であることで、もっと男性も積極的に参加されたらよいのに、と思います。(学生、女性)
- ・ エスノセントリズム(自民族至上主義)の観点からの開発における危険性について、勉強になりました。伝統医療について。興味深い問題でした。(会社員、女性)
- ・ 今までの「伝統」と「近代化」というイメージが変わりました。特に先住民族の社会でのジェンダー分業は近代社会でのジェンダー観とは異なっているということを知りました。今まで良いと思っていたジェンダーフリーを再考するよい機会になりました。また、「家父長制はどこから来たのか」

ということが本当に不思議に思いました。本来なら私たちも先住民族の方のようにジェンダー分業がありながらも階層や差別なく生活していたのかもしれないと思いました。(学生、女性)

- ・ 開発という近代化プロセスの中での女性の立場を、先住民族など様々な立場から見ることで本当に勉強になった。自分たちは何ができるか？自分の立場を認識することは本当に大切なことだと感じた。自分と相手との関係性とともに関心の中での自発性も大事だと感じた。(学生、女性)
- ・ 藤岡さんのお人柄にとっても惹かれました。分業と階層の話や男女の役割と資本主義の話など、とても興味深かったです。女性問題やジェンダーについて考えるとき、対男性を前提にいつも考えていましたが、ジェンダーの中でも女性をひとくくりにできないという当たり前のことに気づくこと、そして自分の立場でできることを考えるということに気づくことができました。(学生、女性)
- ・ 私は移民や定住外国人の権利に関心があり、国民国家について考えたことを今回改めて思い起こしました。植民地主義も関連があったことも思い出しました。タテにもヨコにも広い視点をもってジェンダーの問題を考えたいと思います。(教員、女性)
- ・ 西欧のジェンダーの押し付けがあるということは考えたこともなかった。確かにジェンダーは多様であるし、その地域、文化によっても多様であるのに、自分のジェンダー観を押し付けることはよくないことである。その地域によって違うジェンダー、その多様性を改めて考えさせられた。(学生、女性)

<第3回>

- ・ 男女雇用機会均等法が施行されて久しいが、世間ではまだまだ意識が低い中でどう改善していくか課題が多いように思う。裁判は非常にエネルギーを必要とすることで、大変で、皆が出来ることではなく、結局は納得できなくても現実に妥協していることが多い。本音と建前の格差は大きい。(無職、男性)
- ・ 与えられるのが当たり前という意識が自分には少ないということはずごく感じた。自分たちが考えて動くということが本当に大切だと感じた。(学生、女性)
- ・ 企業で働くということの具体的な辛さが分かりました。来年から働きはじめますが、負けずに生きていこうと思いました。(学生、女性)
- ・ 日本の現況は「豊か」であるということではあるでしょうが、私には、他の国々・地域の人々を直接・間接に「なぐりつけて」得ている豊かさであるという印象があり、たいへん居心地の悪い思いがしています。加害者側のものであるという自覚にもとづいて、自らの労働者としての(私は非正規雇用《有期でもあり》の労働者でもあるわけで)立つ位置を見定めたいと考えています。(今日の議論とズレてゆく自分自身が少し不思議です。)CEDAWの勧告を用いてなんとかアジア地域全体を視野にいたした均等法の改定に期待したい、何か行動したいとも思っています。(団体職員、女性)
- ・ 保育所をご自身で作られたということ、「そんなことができる」ということ、(そのようなことができる私達の世代が気づかないということ)。10年間、毎月1回の勉強会を継続され、しかもパンフレットを作成することで活動を広めていったということ。活動の参画の仕方は様々ですね。参考になります。(団体職員、女性)
- ・ 実際に運動をされている方のお話は説得力もあり、とても勇気づけられます。

<第4回>

- ・ バックアップスクール出身の女性議員による活動とその影響など、もう少し具体例をお聞きしたか

った。でも、大変勉強になりました。(NGO関係、女性)

- ・ 介護保険の見直し、憲法 24 条のあり方の検討など、早くしないと、急がないとどんどん保守的、封建的になりそうな流れを感じています。そんな中で、バックアップされながら流れを切っていく人たちがいることは、勇気が出る話でした。ただ、この“第三の波”に乗っていくことはまだまだハードルが高いような気がして……。自分にはもっと力が必要だなあ、と思いました。(NGO関係、女性)
- ・ もっと政治の場に数で進出しなければ、物事が進んでいかない状況がよく理解できた。(無職、男性)

<第 5 回> 記録なし

<第 6 回>

- ・ <各回のふり返しをして下さったことで、参加できた回の方は再確認できたし、参加できなかった回の方についても少しは理解できたことがとてもうれしかった。三輪さんのまとめ方がとても上手で分かりやすかった。ありがとうございます。(女性・学生)
- ・ 本日は大変貴重なお話、ありがとうございました。「文化」、「伝統」に関わるジェンダーについて大変考えさせられました。日本に限らず、世界各国でも、それぞれの文化・習慣に関するジェンダーの問題など存在していることを、もっと知りたいです。(女性・学生)
- ・ これまでジェンダーの問題についてはほとんど関心がなかったのですが、今日の講義をお聴きして、身近な問題として、また今後の世界を考える上でも重要な問題として捉えることができました。「女性のおしゃべりが世界を変える」という考え方には目からウロコでした。私も女性らしさを生かして、女性として何ができるのかを考えていきたいと思いました(女性・学生)
- ・ 世界の各地で実際に取り組まれている試みや実践が、着実に前に進んでいる事例にすごく励まされました。ありがとうございます。(女性・公務員)
- ・ 私は大学で社会学部社会学科に所属している 3 回生です。大学の講義で文化人類学を専門にしておられる教授のお話の中に、やはり「伝統か人権か」という内容がありました。ある人類学者の著書に色濃く表れている「先進国」の目を、どう捉えるべきかと考えたときに、現地の、私たちにすれば非人道的と捉えられる伝統を外部の者として冷静に受け止めるべきか、それとも人権のために反対を訴えるべきなのか、とても迷ってしまいました。そのヒントを今日のお話で得ることができた気がします。「人権」に基づいた生活の質向上が大切なのだと思いました。(女性・学生)

【今後の課題】

- ・ 昨年度の同様のセミナーに比べると参加者が比較的少なく、テーマの選び方や広報先の絞込み等に課題が残った。国内のジェンダーの課題は重要な問題であるにも関わらず、「国際協力」そのものに関心を寄せる学生の関心はやや低い傾向がある。今後、より幅広い層の方に参加いただけるような広報戦略を考え、今回の反省もふまえて次年度につなげたい。
- ・ 行動に移す、という段階において AVC が提供できる活動は途上国の女性の活動に触れる機会である(海外体験学習(スタディツアー)やボランティアグループを通じて)。しかし、受講生が継続して国内の女性運動に関わる場合は AVC にはないため、どのように国内の団体とのネットワークを広げることができるかは、今後の課題である。